

3. 歴史的特徴

(1) 先史

上ノ国町には、現在 90 箇所の遺跡が確認されている。中でも遺跡が多い天の川河口付近には、旧石器時代～江戸時代の遺跡が分布し、約 20,000 年前から連綿と人々が暮らしていたことが明らかになっている（図 1）。

また、室町時代は松前氏の先祖にあたる蠣崎氏によって築かれた 3 つの館（図 1 - ③⑤⑦）が所在し、中世における北方交易の拠点として繁栄した。このように天の川河口付近は、北海道において稀な歴史を有している地域である。

① 旧石器時代 【町内最古のナイフ形石器】

上ノ国町役場から道の駅もんじゅに行く道の途中には約 20,000 年前のナイフ形石器が出土した四十九里沢 A 遺跡（図 1 - ⑳）がある。この時期は最終氷期の最寒冷期に該当し、気温低下によって主要な食糧源であったマンモスやヘラジカなどの大型動物が激減したため、旧石器人にとって死活問題となっていた。一方で、海水面の低下によって北海道は本州・アジア大陸と陸続きとなったことで、狩りの獲物を求めて活発な移住が進んだ。このナイフ型石器は、本州の日本海側などでよくみられる形式で、上ノ国町に最初に訪れた旧石器人は、本州の人たちであった可能性も考えられる。



ナイフ形石器

② 縄文時代早期～中期 【海水面の上昇と台地上での生活】

10,000 年前頃から、地球が温暖な環境へと変わり、海水面が上昇し始めた時期とされる。上ノ国町では、ボーリング調査によって約 6,000 年前に現在より 0.5 ～ 1 m 海水面が高かったことが判明している。その時期は、縄文時代の前期～中期で勝山館遺跡（図 1 - ④①）のように標高約 100 m という高い台地上で生活を営む人々もいた。

約 5,000 年前には、青森県の三内丸山遺跡などで多く出土する「円筒式土器」が上ノ国町でもみられるなど本州との交流も活発な時期であった。

③ 縄文時代後期～晩期 【海浜部での営み】

約 4,000 年前は、地球が再び寒くなる「小氷期」となり、海水面が現在の海岸線まで下がっている。海水面の低下に伴って陸地化も進んでいき、標高が低い上ノ国地区の市街地（図 1 - ⑧⑧）や洲崎館跡周辺（図 1 - ⑧⑨⑨⑨）で遺跡が確認されるようになった。

約 3,000 年前の晩期には、天の川河口左岸に上ノ国遺跡（図 1 - ④）が形成される。ここから出土した爪型文様を特徴とする土器は、縄文時代晩期の北海道南西部を代表するものとして、「上ノ国式土器」の名称が与えられている。

④ 続縄文時代 【独自の狩猟・漁労文化】

縄文時代が終わり本州では弥生時代に移行し、稲作が盛んとなるが、北海道は気候が冷涼なため、縄文時代に引き続き狩猟・漁労を行っていた。そのため、北海道では弥生時代～古墳時代に相当する時期を本州とは異なり続縄文時代と呼んでいる。

約 2,300 年前、上ノ国町は本州産の鉄製品と「恵山式土器」を使う恵山文化圏に入っていた。

その後は、「後北式土器」や「北大式土器」が使用されているが、これらの土器は北はサハリン、南は東北地方にまで分布が広がっている。

しかし、この時期の遺跡や遺物は少なく、生活の実態が不明となっている。

⑤ 擦文時代【北海道最後の土器文化】

擦文時代とは、本州の奈良・平安時代に相当し、ヘラで擦った文様（擦文）の土器を特徴とする。また、洲崎館周辺では青森県五所川原産の須恵器が出土しており、本州との交易・交流を直接示すものである。汐吹地区の海岸段丘上にあるワシリ遺跡は、集落の周りを堀で囲っており、外敵から身を守る「防御性集落」とも呼ばれている。こういった集落は、本州では北緯 39° 以北の東北地方北部、北海道では道南地域の日本海側に分布しており、津軽海峡を挟んで緊張状態にあったことをうかがわせる。

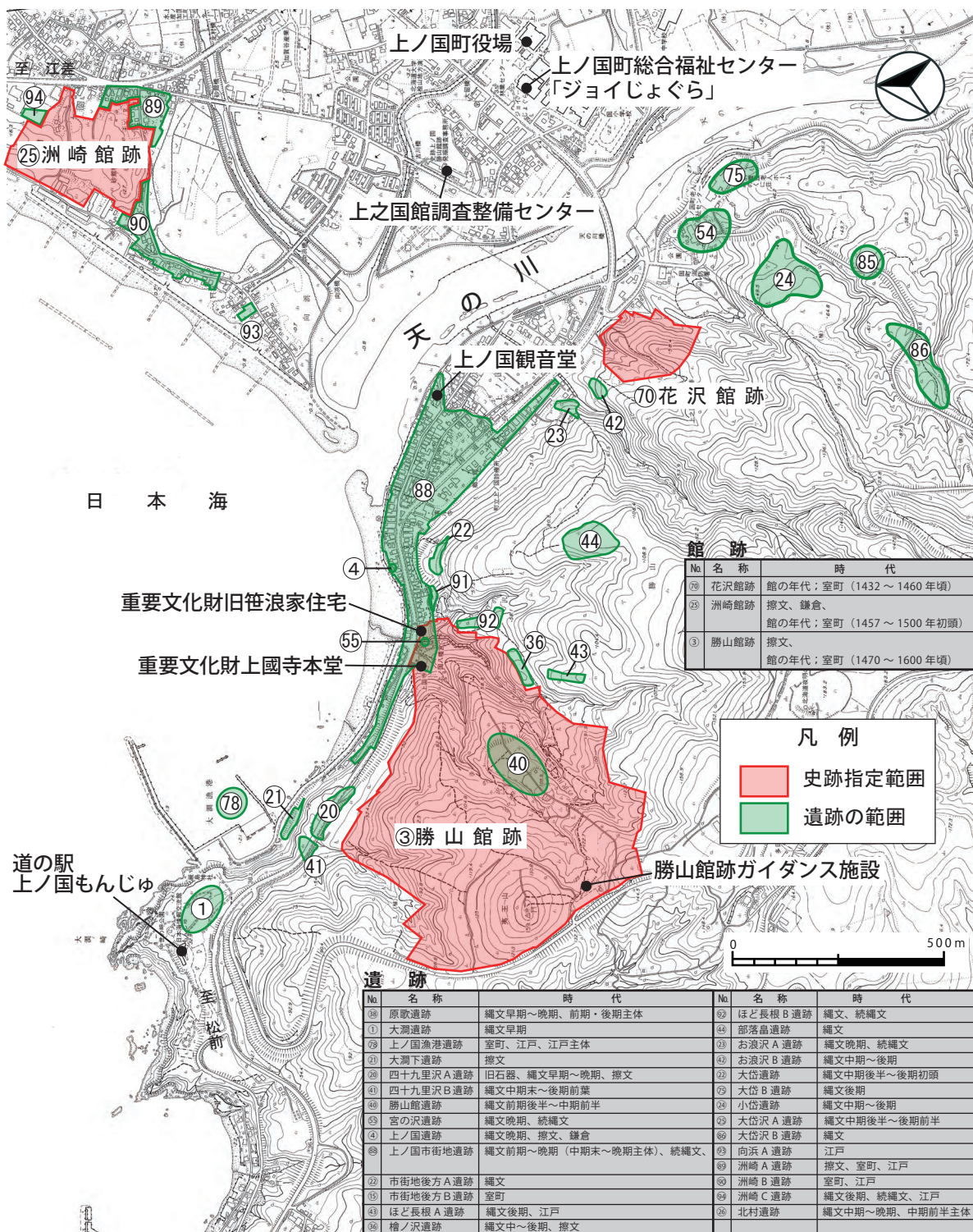


図 1 天の川河口周辺の遺跡と館跡

(2) 有史

① 中世（平安末期～戦国時代）における本州島からみた北海道島（蝦夷地）と上ノ国町

南北朝～室町時代には、本州最北端の日本海に面する港湾である十三湊（図1）が蝦夷沙汰代官（北海道の支配権）を担った津軽の豪族、安藤氏惣領家の本拠であり、北方交易の拠点港湾として繁栄を極めていた。

一方、『新羅之記録』によると、15世紀中頃、上ノ国町に本拠を置いた安藤氏被官の蠣崎季繁が花沢館を築城し、道南地域の館主の一人として実行支配していたという。このように、上ノ国町の中世を考えるためには、北海道内だけでなく、十三湊を含めた本州島側の中世考古学や中世史研究の成果を視野に入れる必要があり、次に年代を追って概要を述べる（図1）。

12世紀／奥州藤原氏と北方交易、アイヌ文化の胎動

12世紀には岩手県平泉町を本拠とする奥州藤原氏の影響を受け、本州島の北端部（青森県域）までが中世国家の枠組みに組み込まれるようになった。この時期、本州島側で北方交易の中心を担ったのは、「奥大道」と呼ばれた奥州を南北に貫く幹線道路が終着する「外ヶ浜」一帯であった（八重樫 2002、斎藤 2002）。

同じ時期の北海道島では、擦文文化終末からアイヌ文化成立へ向かう過渡期に相当しており、極めて断片的であるが中世陶磁器が出土しており、和人勢力の進出状況がわずかに確認できる。

太平洋側では、北海道唯一とされる12世紀代の常滑焼壺（図2）が発見された厚真町の宇隆1遺跡が注目される。宇隆1遺跡は道央部の太平洋側に注ぐ厚真川中流域に位置する。常滑焼壺は口縁部を意図的に打ち欠き、経を入れた経塚外容器であったという見解もあり、奥州藤原氏に関係する勢力がこの地に住んでいた可能性も考えられている（八重樫 2015）。

そして、上ノ国町が所在する日本海側では、積丹半島の付け根にある余市町大川遺跡から珠洲焼叩壺、上ノ国町の天の川南岸にある上ノ国遺跡から珠洲焼叩壺、対岸の洲崎館跡から珠洲焼四耳壺が断片的に出土しているに過ぎず、交易活動が活発に行われているとは言い難い状態にあった。

このように、12世紀代は奥州藤原氏が持っていた政治経済的な求心力により、交易活動や物流の中心は、平泉から外ヶ浜までの陸路を経て津軽海峡を越え、北海道太平洋側から石狩低地帯に至る太平洋交易ルートとの比重が高かったと考えられる。



図1 平泉・十三湊関連遺跡
八重樫 2015 に加筆修正

●平泉関連、▲十三湊関連



図2 宇隆（1）遺跡の常滑壺

13 世紀～14 世紀前半／日本海交易の開始、十三湊・上之国湊の成立

13 世紀になると、本州島では十三湊が本格的に港湾として機能し始める（図 3）。14 世紀前半には溝で囲まれた方形区画・屋敷が出現する。この頃には十三湊を支配した領主権力、安藤氏の存在を示唆する遺構が認められるようになる（榊原 2006）。

北海道の日本海側でも港湾の成立が認められるようになる。上ノ国町では、日本海へ注ぐ天の川支流、目名川右岸の標高 5～15 m の海岸砂丘上に洲崎館成立以前の 13 世紀後葉～14 世紀前葉のまとまった陶磁器が発見され、天ノ川河口部北岸に広がる潟湖を利用した港湾施設（「上ノ国湊」と仮称）が存在したと推定されている（塚田 2015）。また、積丹半島の東、余市川河口にある大川遺跡が港湾として成立する。これらの遺跡からは十三湊遺跡と共通する陶磁器が出土しており、十三湊との関わりが深い和人集団の港湾・交易拠点として、交易ネットワークが成立していたのである。

このような交易活動の変化は、単に日本列島だけで完結していたものではなかった。この時期、北東アジア地域のアムール川下流域やサハリンでは、中国王朝（元～明朝）が進出し、北方先住民と鷹羽や毛皮などの朝貢交易が開始されたことが大きく影響したものと考えられている（中村 2005）。

こうして北方産品は、余市・上ノ国湊にある北海道和人集団の港湾拠点を経て、本州島の十三湊から京都へ運ばれ、日本海交易が形成されていった。また、活発な交易活動が始まる十三湊や上ノ国湊の成立過程は、アイヌ文化成立にも大きな影響を与えたと思われる。

14 世紀中頃～15 世紀前葉／十三湊・上之国湊の発展

この時期、十三湊では先述した鎌倉時代の方形区画・屋敷が埋め立てられ、砂洲中央に東西方向に渡って大土塁と堀が築かれる。大土塁と堀を基準線とした本格的な町割りが実施され、都市計画的な配置がみられる最も繁栄した段階を迎えるようになる（図 4）。

これは「津軽の大乱」による安藤氏惣領家の交代に伴う出来事で、新たな惣領家による港湾都市・十三湊の発展を意味するものであった。「津軽の大乱」とは、鎌倉時代末期の元亨 2（1322）年～嘉暦 3（1328）年に外ヶ浜内真部（青森市）に拠点を構える安藤季久と当時の惣

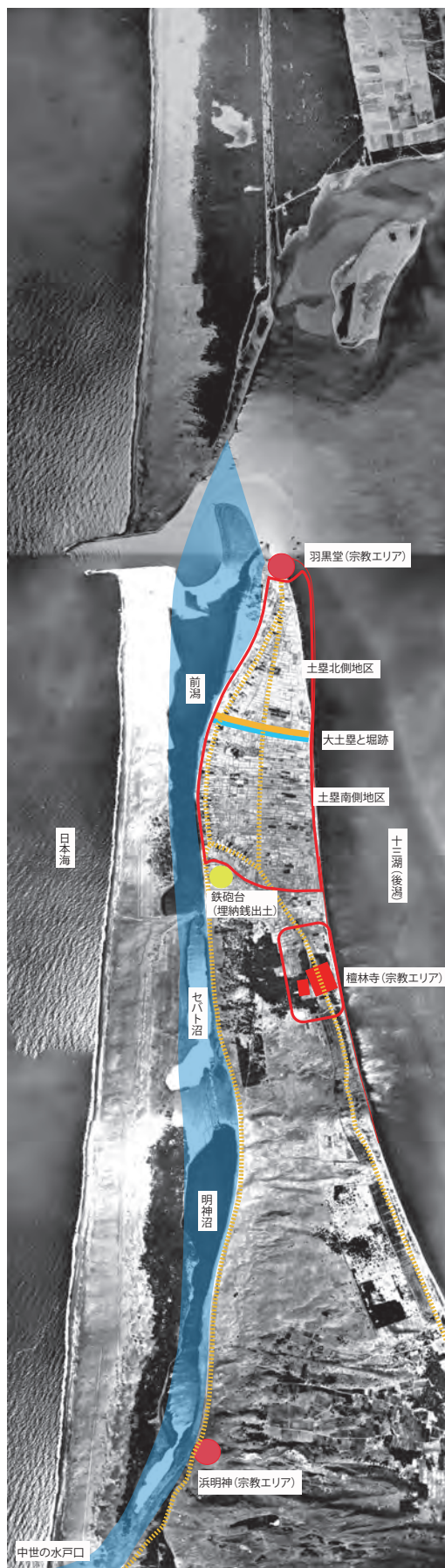


図 3 十三湊遺跡の上空写真

領家で西浜折曾関（深浦町）にあった季長が蝦夷沙汰代官職を巡って、争いを起こし、鎌倉幕府の滅亡の要因になったとされる大事件である（斎藤 2002）。この事件によって、安藤氏惣領家が季長から季久へと変更され、季久（のちに「宗季」と改名）は北条得宗家から津軽西浜を拝領し、十三湊に本拠を置くこととなった。これは安藤氏惣領家と蝦夷沙汰代官職の変更だけでなく、北方交易の中心が奥大道（外浜）・北海道太平洋ルートから日本海ルートへ大きく変わっていったことを意味するものであった。このことは上ノ国湊や余市大川遺跡でも前段に比べて活発な交易活動の様子が出土陶磁器の増加から窺える。

15 世紀中葉／十三湊再編から廃絶期、道南十二館と史跡上之国館跡の成立

この時期、十三湊では湊の景観が大きく変わり、間もなく廃絶に向かうことになる。土塁北側地区では、大規模な火災を受けた痕跡や最盛期の都市計画的な屋敷割りを破壊するような遺構群が多数認められる。特に火事場整理跡とみられる集石土坑から陶磁器の一括資料が見つかっており、これらが 15 世紀前葉を下限とする一括資料であることが判明している（市浦村教委 2003・2005）。

これは『満濟准后日記』に記録される 1432（永享 4）年、南部氏との抗争に伴い北海道島へ退去した安藤氏が、室町幕府の調停によって再度十三湊へ帰還した際の復興の様子を示す遺構と考えられる（榊原 2004）。このように土塁北側地区が衰退する様子を示す一方で、土塁南側地区では道路に沿った街区（町屋）や南端部に中世寺院（檀林寺跡）が形成され、都市の再編が行われたことが判明している。また、十三湊では湊町から約 3 km も離れた十三湖北岸の丘陵端部に福島城「内郭」と呼ばれる方形居館が成立する。

一方、北海道の日本海側では、余市大川遺跡がこの時期まで和人の拠点港湾として機能していたが、これ以降廃絶を迎えており、まさに十三湊と連動する状況であった。

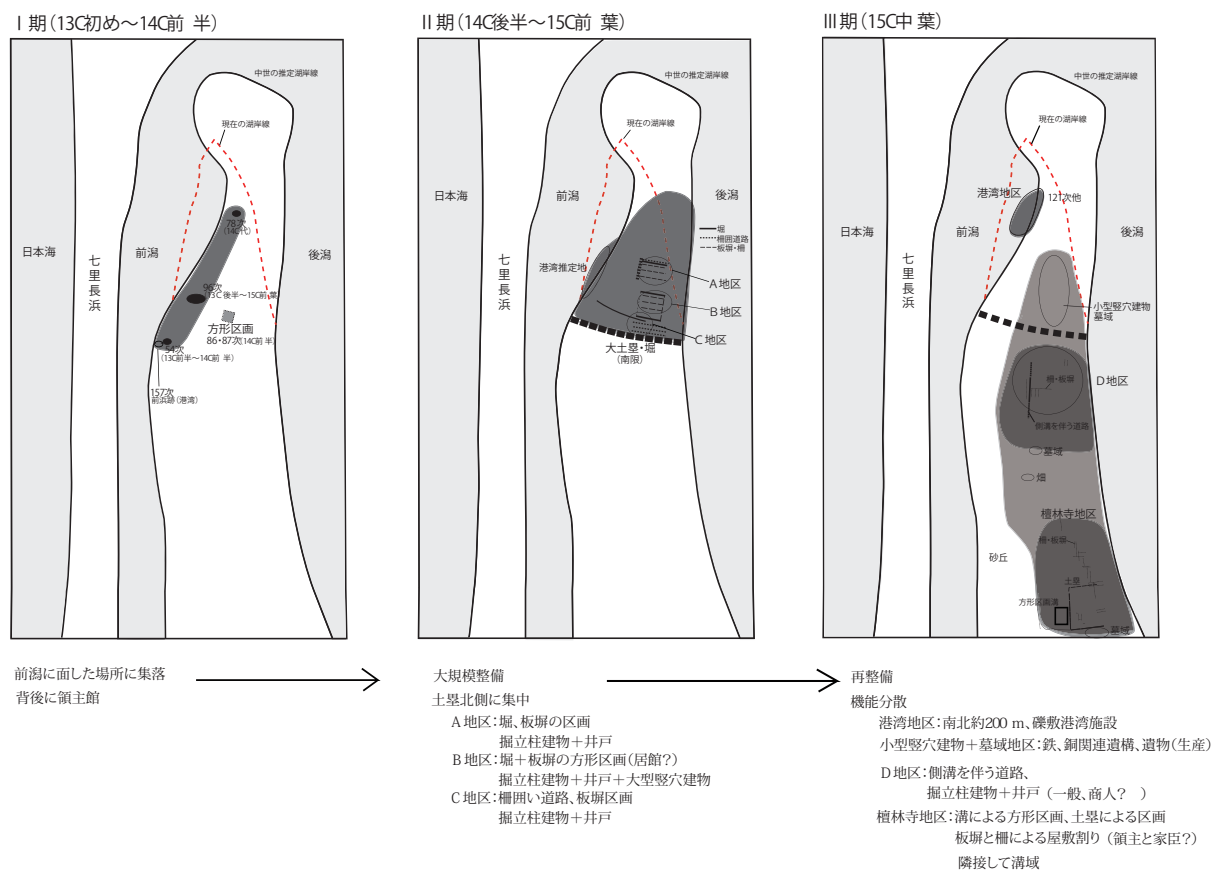


図 4 十三湊遺跡の変遷

上ノ国では、この時期、天の川南岸に花沢館、北岸に洲崎館が機能していたことが出土陶磁器の研究から明らかである（図5）。花沢館は15世紀中葉、洲崎館は15世紀中葉～16世紀前葉にかけてそれぞれ機能しており、『新羅之記録』、『松前年代記』などの文献史料の年代観ともおおむね合致していると言える。

『新羅之記録』によれば、花沢館は蠣崎季繁が館主として支配し、長禄元（1457）年のコシヤマインの戦いで陥落しなかった。季繁の客将としてこの戦いに勝利した武田信広は、季繁の娘婿（安藤政季の娘とされる）に迎えられて後継者となり、対岸の洲崎館に据え置かれたとされる。のちに松前藩の祖となる人物である。新たに洲崎館を整備することは、両館を中心とした天の川河口の川湊を交易拠点として支配するためのものであると同時に和人とアイヌの境界線であった天の川北岸もおさえることで、蠣崎氏の勢力拡大を意味するものと考えられる。



3 館が機能していた時代

時代区分	鎌倉	室町						安土桃山	江戸
年代	1 3 0 0		1 4 0 0		1 5 0 0			1 6 0 0	
花沢館跡 (蠣崎季繁)				(1432～1462年頃)					
洲崎館跡 (武田信広)					(1457～1500年初頭)				
勝山館跡 (武田信広)						(1470～1600年頃)			

図5 史跡上之国館の年代と変遷

洲崎館跡は、日本海へ注ぐ天の川の支流、目名川右岸の海岸砂丘上の標高5～15 mに位置するが、飛砂に覆われているため、その構造や範囲などは明確ではない。

館跡からは昭和54（1979）年に15世紀前半代の珠洲焼播鉢を被せたとみられる中世頭骨1体が出土しており、特異な埋葬習俗の一端が明らかとなっている（松崎ほか1981）。また、昭和43（1968）年には洲崎館南側、町道（北村～向浜線）付近から、開元通宝（唐・621年）～永樂通宝（明代・1408年）の1,500枚以上に及ぶ銅銭が発見されている（永田1968）。

「下之国」に当たる函館市志海苔地区は、津軽海峡に面した海岸段丘上に位置し、室町期の『庭訓往来』に登場する北方特産物、宇賀昆布の産地としても知られる。志苔館跡出土の陶磁器（函館市教委1986）は、15世紀中葉の限定された時期で、『新羅之記録』が示す長祿元（1457）年のコシヤマインの戦いによる同館跡の滅亡直前の資料と考えられる。古瀬戸製品では古瀬戸後Ⅳ期古段階の資料が下限となっており、出土陶磁器からみても十三湊と志苔館跡は、ほぼ同時期に廃絶したとみて間違いない。

また、志苔館跡は北海道唯一の方形居館であり、北東北でも十三湊・福島城内郭跡や秋田湊の湊城跡のほかにはほとんど類例はなく、安藤氏城館の系譜といえる。

志苔館跡を含む道南十二館の成立時期は、15世紀中葉以降と考えられ、アイヌ民族との抗争が激しくなる中で交易拠点や権威を示す象徴としてだけでなく、軍事・防御的機能を重視した和人館がこの時期に成立したのである。

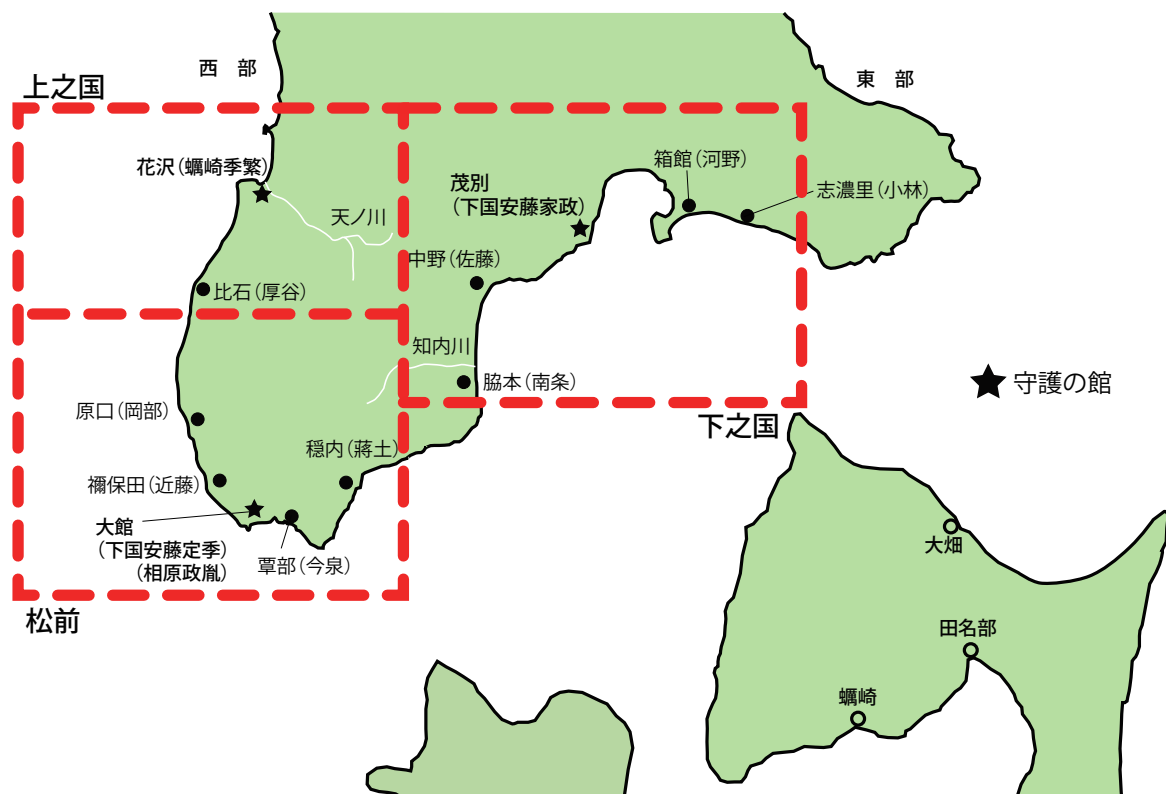


図6 道南十二館と三守護体制

15 世紀後葉／十三湊から勝山館へ

本州島側では嘉吉 2（1442）年、南部氏による 2 度目の攻撃によって十三湊がまもなく廃絶し、日本海側では安藤氏の残党勢力が拠った深浦湊、津軽海峡に面する外浜では浪岡北畠氏が支配する油川湊に中核的な港湾機能が移ったとされる。

一方、北海道側ではコシヤマインの戦いを経て、三守護体制が崩壊する段階である（図 6）。道南十二館の和人勢力が統合され、「松前」守護の勢力が相対的に低下し、勝山館を本拠とする蠣崎氏と茂別・矢不来館を本拠とする下国安藤氏の勢力がせめぎ合う、「上之国」対「下之国」の守護勢力の対立構造が鮮明になると指摘されている（関根 2014）。

「下之国」に位置する矢不来館跡は発掘調査で 1460・70 年代～ 1510 年代頃まで機能していたことが判明し、威信材となる多数の陶磁器を所有するなど下国安藤氏の経済力が伺える（関根 2014）。

こうした対立構造が崩壊する契機となったのは、1512（永正 9）年の東部アイヌ民族の武装蜂起であった。矢不来館跡もこの時に焼失・廃絶した可能性が高いという。この事件をきっかけにして下国安藤氏の勢力が弱体化する一方で、日本海側の上ノ国では、信広が新たに勝山館を築城し、十三湊に替わる新たな北方交易の拠点港湾として機能することとなったのである。

② 勝山館の時代

『新羅之記録』によれば、寛正 3（1462）年に季繁が亡くなり、信広は文明 5（1473）年に「上国館」の上に八幡宮を造り、館神を祀ったとされる。勝山館跡の発掘調査の成果によれば、15 世紀後葉に勝山館が成立したことが判明したほか、館神に相当する神社跡の遺構も発見されたことから、「上国館」と呼ばれたものは勝山館跡であったことは明らかである。このよ



図 7 アイヌ墓（左右）と和人墓（中央）

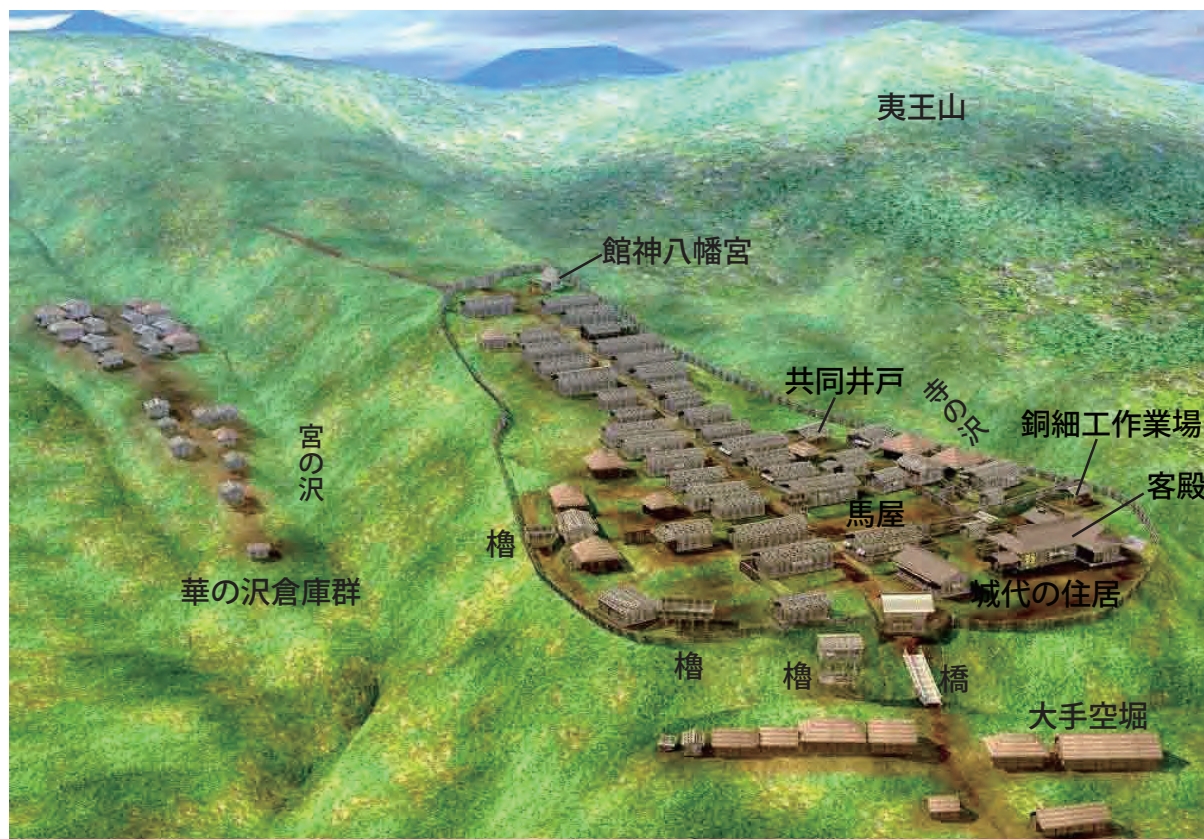
うに季繁の死後、名実ともに蠣崎家の主人となった信広が、アイヌ民族との境界とされる天の川の南岸に政治・軍事・交易の拠点として新たに築いたのが勝山館であった。

勝山館は、標高 159 m の夷王山の中腹にあり、東に宮ノ沢川、西に寺ノ沢川に挟まれた海岸段丘上に位置する堅固な山城で後背地には宗教的結界として夷王山墳墓群を配置した。

発掘調査では、200 棟を超える掘立柱建物跡、約 70 基の竪穴建物跡、礎石建物跡、井戸跡、土壇、空堀・柵・橋・通路・貝塚（廃棄場所）などの遺構が見つかっている。後方の夷王山墳墓群には、勝山館が機能した時期に伴う約 600 基を超える墳墓が点在し、和人の土葬墓・火葬墓・火葬施設、アイヌの土葬墓が検出されている。出土遺物は、中国・朝鮮・本州産の陶磁器、鉄製品、中国・ベトナム・琉球で生産された銅銭・大銭、木製品、石製品、アイヌが使用した骨角器の他、魚骨・獣骨などの動物遺存体を合わせると約 10 万点を超え、北方ルートでの搬入が考えられるガラス玉・大銭なども出土するため、北と南からの物流があったことが想定される（図 8）。

また、和人の拠点と考えられていた場所から、アイヌの遺物や墳墓が検出されたことは、勝山館の中でアイヌと和人が混住していたことが明らかとなり、従来想定されたアイヌと和人の関わりとは異なる関係があったことを示している（図 7）。

このように、上ノ国守護に過ぎなかった蠣崎・武田氏は勝山館で勢力を蓄え、16世紀以降には松前に進出、檜山（下国）安藤氏に代わって蝦夷島（北海道）の代官となり、さらに豊臣・徳川政権の公認を得て、慶長9（1604）年に松前藩が成立する礎となったのである。勝山館跡の出土陶磁器が16世紀前葉で出土量のピークをむかえ16世紀末で途絶えていることは、文献史料の成果と見事に一致している。



陶磁器



化粧道具・下駄



武具・漁具



茶道具



調理具



骨角器

図8 勝山館の復元CGと出土品

③「新羅之記録」と「松前年代記」

はじめに ―「松前年代記」とは―

当町は北海道内で中世に関する文献に登場する数少ない自治体であるが、その歴史は北海道でほぼ唯一の中世資料とされ1646（正保3）年に成立した松前景広（1600～58）編の「新羅之記録」（以下「記録」と略記）に全面的に依拠して考察されてきた（北海道1980）。

「記録」は「松前家の歴史書」と紹介される場合が多く、そのように評価されて疑われることがなかったが、本文中で「当家の元祖信広朝臣以来代々年譜ならびに名誉奇特の記」と題されるように、客観的な立場で編纂した歴史書ではなく、松前蠣崎氏（とりわけ松前景広家のため）の由緒書、家譜であり、安易な利用は慎まなければならないとする評価がある（大石2001）。

重要な論点なので紙幅を割いて引用する。

家の歴史の多くがそうであるように、『新羅之記録』には蠣崎氏の夷島支配の正当性を強調するために虚飾を加えている部分がある。したがってそれを史料として利用する際には、その虚飾の部分を取り除く必要があるし、意図的に削除された事実があることも考えておかねばならない。『新北海道史』の解題がいうように、『新羅之記録』はまさに北海道史の『古事記』『日本書紀』なのであり、十五、六世紀の北海道史のほとんど唯一の文献史料として貴重なものであるが、同時にその利用にあたっては、厳しい史料批判が必要な史料なのである。

これほど簡潔・的確な警鐘がありながら、現在も「記録」に重きを置いた歴史解釈となっている状況であるが、当町の中世を記す文献は、実は「記録」だけではない。

「松前年代記」（以下「年代記」と省略）は、「松前藩の家老を務めた松前広長（1737～1801）の編纂した総合歴史資料集『福山秘府』（全60巻。1780年脱稿）の「年歴部」において、「記録」とともに引用・考証されたことで知られる古い文献資料でありながら、存在・内容ともに十分に顧みられないまま、現在に至る。

その概要を示すと、干支・和暦・記事の順に罫線で区切って記述する体裁を取り、1443（嘉吉3）年に安東太盛季が南部義政に攻められて津軽から松前に落ち延びたところから筆を起こし、年ごとに記事を端的にまとめたもので、1667（寛文7）年まで断続的に記事が続く。特記事項がなければ記事が記されない年もある。

広長は「年代記」を、寛文年間（1661～73）に海渡山阿吽寺住持の快雅が著したものだろうか、と考察し、内容は「記録」に依拠して略記したか、と感想を記したが、これは18世紀後半という時代状況のなかで、家老職までのぼりつめた人間が、当時の8代藩主松前道広（1754～1832）に披露する目的で編纂した書物に叙述された見解であり、松前家の先達が著した「記録」を是とし、僧侶が著したかとみられる「年代記」を非とするのは当然といえは当然の姿勢であろう。

現代の文献史学的手法で「年代記」を虚心坦懐に分析する必要があるのだが、広長の見解を基に「年代記」は現在でも「記録」の略記とされ、資料的価値を見出されていないことが多い。

ところが、「記録」の記事が信ずるに足りないとする際、盛んに引き合いに出されるのが、「福山秘府」採録の「年代記」記事であって、「年代記」は『福山秘府』に隠れてはいるが、現代において案外に利用されている資料なのである。

「年代記」の編者は、寺社関連記事が多いことから、松前広長の考察のとおり、寛文年間に住持として阿吽寺にいた快雅とみてよいだろう。

年ごとに記事を連ねる年代記は、完成後に記事の追加が認められるもの（最も古くは「鎌倉年代

本稿では、「新羅之記録」と「松前年代記」の内容を比較しながら、新たな上ノ国の歴史像を構築してみたい。

和人とアイヌの戦いを書き連ねる「記録」にあって、この館名だけは緊張感を抱かせない妙な違和

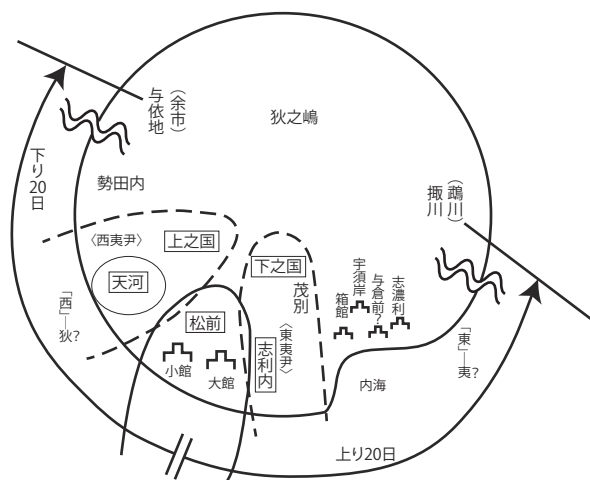


図1 「新羅之記録」にみる地理認識 模式図
全体図

感を覚える。アイヌの長タナサカシと和睦して館内に誘い込んで謀殺する文脈に出てくる「和喜之館」なので、和議⇔和睦にからめた表記の可能性もあるのではないだろうか。

しかしながら、現代の我々は勝山館跡の発掘調査成果から館内で和人とアイヌが共生し、夷王山墳墓群に和人とアイヌが隔たりなく葬られていることを知っている。筆者の憶測の域を出ないが、景広もこうした事実を認識しており、それを館の名称に潜り込ませたのではなかったか。

次いで「年代記」みる地理認識を年代順に抜粋して確認したい。なお、「年代記」は干支・和暦・記事（漢文）の順に記載するが、以下の抜粋では本冊の凡例にあわせて、西暦（和暦）・記事のみとし、記事（漢文）は読み下しにし、語句には適宜ふりがなを付け、特にアイヌ語とみられる語句にはフリガナを付けた。また、資料本文の訂正などには（〇〇）（〇〇カ）（〇脱）として情報を補った。

- ① 1189（文治5）年 七月十九日、鎌倉の將軍右大将頼朝卿、奥州の泰衡を追討の御節、^{ぬかのぶ}糠部・^{つがる}津軽より人多く此国へ逃げ渡る、彼等薙刀を舟舳に結え付け、櫓櫓となし漕ぎ渡る、是れ当国^{むかわ}舩舳車櫓の根本なり、是より東は^{むかわ}阪川、西は^{よいち}與依地、四十日程の内、村々里々に民居住す、

- ② 1443（嘉吉3）年 十二月十日、下国安東太盛季、南部大膳大夫義政に打ち負け、小泊より此国へ渡らんと欲するの処、順風吹ず、^{ここ}粵に永善坊の通明法師、天地を俯し仰ぎ、肝膽を碎く、忽ちに巽風吹き船出る、跡より軍兵追いかたる、然りと雖も浮船沖に^{なが}洋るにより力及ばず引き退く、是より十二月十日の巽風、道（通）明東風と謂う、此の時山王坊・永善坊・万願寺・實相坊同じく渡海す、

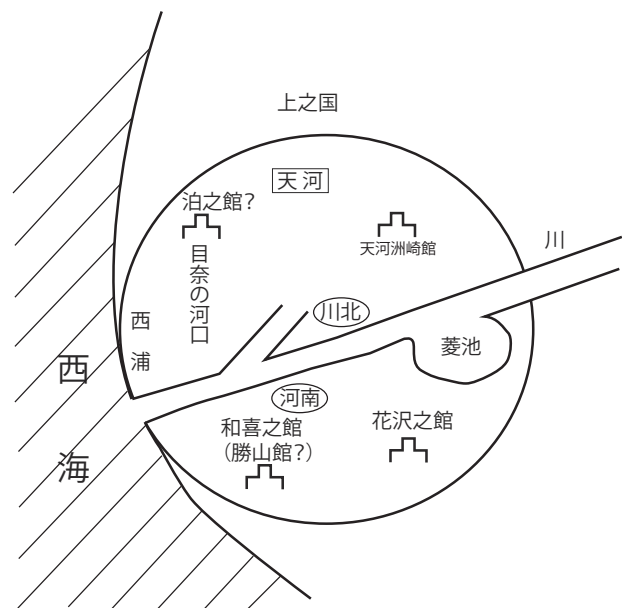


図2 「新羅之記録」にみる地理認識 模式図
上ノ国部分図

- ③ 1456（康正2）年 春、^{おこ}東国大乱す、其の^{しのり}発りは、志濃利の鍛冶屋村に^{オツカイ}乙孩一人来たりて鍛冶に^{びとう}剃刀を打たしむ、然るに乙孩と鍛冶と剃刀の善悪価を論ず、鍛冶剃刀を取り乙孩を突き殺す、依って夷悉く蜂起す、而るに此年より後の次第（第）、^{えぞ}東西四十日程の人民滅ぶ、三月光広生まる、
- ④ 1457（長禄元）年 五月十四日、^{えぞ}夷蜂起して志濃利の館主小林太郎左衛門良景・箱館之河野加賀守政通を攻め撃つ、其の後、中野三郎（之館カ）佐藤三郎左衛門季則・脇本の南條治部少（輔脱）季^{ないぐん}継・内郡の館主^{こもつち}蔣土甲斐守季直・^{およべ}覃部の今泉形（刑）部少（輔脱）季友・松前の守護下国山城守定季・相原周防守政胤・^{ねぼた}称保田の近藤四郎左衛門季常・原口の岡辺六郎左衛門季澄・比石の畠山末孫厚谷右近将堅（監）重政、所々の重鎮を攻め落とす、
- ⑤ 1458（長禄2）年 去年^{えぞ}反逆の夷の^{おさ}長胡奢^{コシャ}魔院父子二人其の外、^{ウタリ}侑多利^{あまた}数多を斬り殺す、之に依

って凶賊悉く敗北す、恒季 山城守

- ⑥ 1459（長祿3）年 去々年**東国**大乱す、之に依って宇須岸の隨岸寺松前に移る、
- ⑦ 1462（寛正3）年 夏、**天河**の西海に夜々光る物有り、円増院の秀延阿闍梨汀に出て之を見る、然れば此の光次第（第）に阿闍梨の所へ奇（寄）せ来る、之を引き上げて見る、則ち藻の内に毘舍（沙）門の像在り、依って**天河**に御堂を建立す、則ち秀延別当に為す、
- ⑧ 1471（文明3）年 夏秋、兵乱す、疾疫飢饉海辺風災、人夷^{ひとえぞ}多く死す、
- ⑨ 1473（文明5）年 **神の国館の内に**八幡宮を建立す、
- ⑩ 1495（明応4）年 二代光広 信広の息男**天河**に住む、宮内少輔と号す、
- ⑪ 1513（永正10）年 六月二十七日、大館合戦、守護相原彦三郎季胤・村上三河守政義自害す、此の時寺社咸滅ぶ、殺さる僧巫は勝計すべからず、法幢寺は絶え、法源寺は残る、
- ⑫ 1514（永正11）年 三月十三日、光広息男良広船百余艘にて**天河**より松前へ移る、秋、寺社還り僧を索む、高広**神の国**を守る、
- ⑬ 1521（大永元）年 三月廿日、二郎高広^{みまか}薨る、三十九歳、基広**神の国**守護たり、
- ⑭ 1525（大永5）年 春、**東西両道**の夷蜂^{えぞ}起す、
- ⑮ 1528（享祿元）年 夏、蜂起す、良広之を討つ、
- ⑯ 1529（享祿2）年 春、多那^タ嶮^ナ瀬^{サカシ}多^せ内^{たない}へ出張る、工藤九郎左衛門尉祐兼をして之を討たしむ、祐兼の軍破れ打（討）ち死す、終に**神ノ国**を攻む、此の時祐兼弟祐致知略を以ゆ、
- ⑰ 1530（享祿3）年 大将那^ナ嶮^{サカシ}城下へ来たらしむ、良広弓を以って之れを亡ぼし、残党敗比（北）す、論^{ひとえ}（偏）に祐攻（致）の功也、是れ祐長四代の孫光祐が子なり、
- ⑱ 1531（享祿4）年 五月廿五日夜雨、大館を侵さんと欲す、良広其^{あしおと}の躰を聞き之を射殺す、
- ⑲ 1534（天文3）年 四月十六日、**神の国**に河蛇^{かわへび}出づ、良広之を射る、此の後、矢曾^{すべ}て物に当らず、
- ⑳ 1536（天文5）年 六月廿三日、西夷^{えぞ}の^{はかりごと}返^タの大將多^タ離^リ困^コ那^ナ夫婦を討つ、是れ多^タ那^ナ嶮^{サカシ}の^{サカシ}賀^ナなり、是より**東西**平均なり、
- ㉑ 1548（天文17）年 春、**神の国**の蠣崎大郎基広反逆す、長門の藤六広益之を討つ、蛎崎次郎高

広の子なり、九月三日、慶広生まる、南條**神の国**を守る、

- ②② 1551（天文 20）年 始めて東西の司^{つかさ}を置く、東は知蔣^{チコモタイヌ}多犬^{しりうち}、志利^{ハシタイヌ}内に居える、西は波志多犬、**天河の郡内**^{ぐんない}に居える、夷狄^{いてきしょうはくおうかん}商^{はつと}船往還の法度を定む、
- ②③ 1552（天文 21）年 **神の国の城主**南條越中守広継の室逆意を企つ、季広近習の者丸山某子に語らい、季広の一男彦太郎宮内少輔舜広・次男万五郎元広を鶴^{ちん}（鳩）毒を以て殺す、之に依て広継室生害せしむ、丸山に斬罪を行ふ、此の時折加内村^{おりかない}を以て、両息没後の為に牌取（所）を長泉寺領に為す、後三十三廻の間、川に魚之れ無し、
- ②④ 1567（永禄 10）年 夏、沙門岌西正行寺を草蒼（創）す、**当国**浄土寺の始めなり、
- ②⑤ 1571（元龜 2）年 **神の国館神**を立つ、五月廿一日供養す、広正之を営む、○盛広生まる、
- ②⑥ 1582（天正 10）年 五代松前中興慶広公、季広の三男、母は河野加賀守政通の女なり、隠居せしめ、国を慶広に禪る、九月三日、**神の国館神**を再興す、妙広之を営む、
- ②⑦ 1589（天正 17）年 四月慶広**神ノ国**へ行く、二十七日の夜、盛広の居所火事、珍器等皆以て焼失す、
- ②⑧ 1610（慶長 15）年 三月二日、花山院大納言定好の公達羽林忠長勅勘を蒙る、二十二歳にして此の国へ左遷せらる、少時**神の国**に居る、其の後松前に移る、万福寺に住居せらる、
- ②⑨ 1640（寛永 17）年 六月十二日、**東国**内浦の嶽俄に焼け崩れる、十三日滄海動揺して濫滔来る、**東国**人夷休（水）死す、十四日、國中闇の如く、東西弁ぜず、此の時硫黄の灰降り虚空に満つ、天地の振動間無し、或いは長毛降り、虫降る、十五日、天晴、夏、金穿蜂^{かなほり}起して亀田より津軽へ渡る、○霜月稻荷大明神を立つ、

以上の抜粋から「年代記」にみる地理認識を個別にみていきたい。

まず、「年代記」では「上ノ国」と記すことは一切なく、⑨ 1473 年を初出として「」「神ノ国」と記す。（以下、表記を「神ノ国」に統一して叙述する。）『上ノ国村史 復刻版』（1978）ではわざわざ冒頭で

上ノ国の名の起りは神ノ国であるといい、これを裏づける伝説や、神ノ国と誌している文献もあるが、上ノ国村の名はやはり上ノ国にはじまったものと考えられる。古くは、松前を中心として本道の西海岸地方を上ノ国、東海岸地方を下ノ国といった。

と記し、「神ノ国」名称があることを認めている。上ノ国村（当時）にとってはなかば周知の事実だったのであろう。前掲書では典拠を示していないが、この「神ノ国」資料の最も古いものが「年代記」なのである。

さて、「神ノ国」の地名は館や城の語とともに記されることから、小さな領域に限ったものだったとみられる。この「神ノ国」とは、もちろん現在の勝山館を中心とした地域を指すことに間違いない。

神はアイヌ語の「カムイ (kamuy)」(神)にも通じるので、アイヌ・和人双方にとって何かしら信仰に関係することからの命名だったものか。

勝山館の立地を考えるならば背後の夷王山の存在は無視できず、天の川河口部にあってなだらかな円錐形を呈するその山体は、他の山並みとは一線を画する。この地のアイヌにとって、夷王山が「チノミシリ (ci=nomi=sir)」(我ら祈る所)だったとみることもできようか。和人にとっても山は信仰対象であるのはいうまでもない。菅江真澄が夷王山山頂の小祠でみたという「医王山頭陀寺、永禄七年三月」という一文(菅江 1789)は、かつて寺院が建立されていた可能性をうかがわせる。ちなみに勝山館跡中心部の大手口は当然のことながら、客殿跡前庭から西方向を仰げば夷王山頂上が見え、館神八幡宮跡前に立っても左方向に同じく頂上が見える。勝山館は夷王山を多分に意識して建物等が配置されているといつてよいだろう。アイヌ・和人ともに信仰する聖なる山の麓の土地として「神ノ国」と命名されたのではなかったか。

信仰を共有できたからこそ、勝山館内でアイヌと和人は共生できたのかもしれない。「神ノ国」名称については今後さらなる分析・考察が不可欠であるが、現段階では上記のように考えておきたい。

次に「天河」であるが、これは「記録」にも記され、現天の川の存在から「あまのがわ」と読みたくなるが、「テガ」と音読みすべきだろう。「記録」より四半世紀ほど前に宣教師ジェロニモ・デ・アンジェリスがローマのイエズス会本部へ送付した「蝦夷地図」(1621)の「地図上の書き入れ記事」(チースリク 1967)に、以下の記載がある。

第九、小生が初めてへ行ったときには、ひどい嵐のために松前へ着くことができなくて、ツガ^{マツマエ}の港へ入りました。また別の船は内川^{ナイ}へ入港したのでございます。

「蝦夷地図」の第九の「ツガ」(Tçuga)は、松前の北にあり、河川の河口部に位置し、西には奥尻島があり、北には瀬田内が描かれる場所である。松前から瀬田内にかけての日本海沿岸の河口部に、「ツガ」に完全に合致する地名はないものの、「記録」に記される「天河」を音読みすると「ツガ」に近いことから、「ツガ」は「天河」であり、「天河」は「テガ」と音読みされていただろうと推測されている(上ノ国村 1958、松崎 2001)。

「ツガ」にはどのような意味があるのか。アイヌ語の「トガ」は「沼の上手」、「ほとり」、「岸」のを指すとされ(山田 1983)、「ツガ」「テガ」は「トガ」に通じるのではないかと推測されている。現天ノ川河口部で旧河道から三日月湖となったいくつも沼沢を想像するとき、「沼の上手」「ほとり」「岸」に、「トガ」に相応しい場所となろう。

では「天河」はどれだけの領域を示す地名なのだろうか。それを考えるには② 1551 年の「天河の郡内」が手掛かりとなるだろう。郡は中世において複数の郷村を包摂する行政単位を指す。中世の渡島半島で本州同様に郡郷制が布かれていたことを確認できる文献資料は見出されていないので、ここでいう「郡内」とは「本州における郡と同様の広さを有する範囲」という程度の意味合いと考えておきたい。

⑦ 1462 年条の「天河の西海」からは現天ノ川の河口部を想起させるが、「年代記」には洲崎館の名も洲崎という地名も記されないので、「天河」は現天の川河口部を中核とした、天の川流域全体を指す広域地名ととらえておきたい。

「神ノ国」「天河」を超える名称として「此国」「当国」がみられる。「記録」では「狄之嶋」が見られるものの、「年代記」には見られず、「此国」とは蝦夷島、現在の北海道全体を指すのだろうが、国名までは明言されない。夷之国という意味合いだったものだろうか。

これとは別に、「東国」「西国」が何度かみられ、一度だけだが「東西両道」もみられる。これらはひとまず同じ地理認識とみなしてよいのではないだろうか。ここにみる東西とは松前を起点として太平洋側＝東、日本海側＝西と分けているようで、和人が往還できる東限は鵜川、西限は余市となるようだ。

これらを模式化すると図3のようになる。

西国の中に天河、瀬多内が、東国の中に知内、宇須岸、与倉前、志濃利があり、両者の交わる扇の要の地として松前があると認識され、神ノ国は西国の天河の中の小さな領域として存在していたと考えられる。

ここには「記録」にみられる三守護体制のような地域区分は読み取れず、「上ノ国」も「下ノ国」もなかったことになり、「上ノ国」「下ノ国」を元に考えられた北奥羽の下国安藤氏と湊安藤（上国安藤）氏という解釈も根拠を失うこととなる。

「年代記」の地理認識は「記録」のそれとは異なり、近世、幕藩体制下で区分けされた東蝦夷地・西蝦夷地に非常に近いものであったことがわかる。蝦夷島を東西にわけてとらえることは15世紀中ごろからすでに始まっていたことになり、中世と近世の間で地理認識に大きな断絶はなく、むしろ連続したものだったことになるだろう。

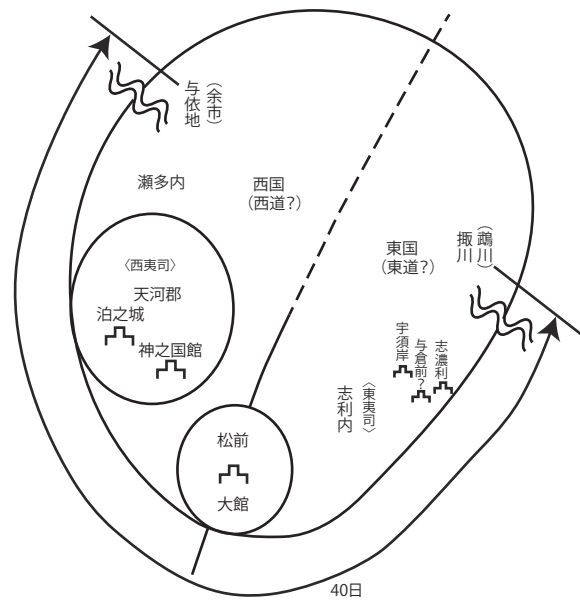


図3 「松前年代記」にみる地理認識模式図

「松前年代記」と「新羅之記録」にみるアイヌ蜂起に関する歴史認識について

「記録」における和人とアイヌの記事はほとんどが対立・抗争であり、おおよそ和人が勝利を収めてアイヌを屈服させるという筋書きであり、従来はこれが近世における和人のアイヌ抑圧の前史として違和感なく受け止められてきたように思われる。

「記録」に依拠した歴史認識の下では、夷王山墳墓群に埋葬されたアイヌや勝山館跡にみられる和人とアイヌの共生の痕跡に対して、現代人が非常な驚きをもって受け止めるのもやむを得ないことであるが、「年代記」でも和人とアイヌの記事は対立・抗争として描かれるのだろうか。

以下では「年代記」のアイヌ蜂起記事を抜粋し、直後に同じ年条の「記録」の記事を掲げて、比較してみたい。なお、「年代記」の翻刻は2)に準じて行い、「記録」は『新北海道史』(1969)所収書き下し文を基本として、本冊凡例にならって適宜常用漢字に改め、句点はすべて読点に改めた。

- ① 1456(康正2)年 春、東国大乱す、其の^{おこ}発りは、志濃利の鍛冶屋村に^{し の り}乙孩一人来たりて鍛冶に^{オツカイ}剃刀を打たしむ、然るに乙孩と鍛冶と剃刀の善悪^{びとう}を論ず、鍛冶剃刀を取り乙孩を突き殺す、依って夷悉く蜂起す、而るに此年より後の次第(第)、東西四十日程の人民滅ぶ、(後略)

^{なかころ}中比内海の^{う すけし}宇須岸夷賊に攻め破られし事、志濃^{し の り}里の鍛冶屋村に家数百有り、康正二年春、乙孩^{オツカイ}来て鍛冶に^{マキリ}剃刀を打たしめし処、乙孩と鍛冶と剃刀の善悪を論じて、鍛冶剃刀を取り乙孩を

突き殺す、之に依て夷狄悉く蜂起して、康正二年夏より大永五年春に^{いた}迫るまで、東西数十日程の中に住する所の村々里々を破り、者某^{シヤモ}を殺す事、元は志濃里の鍛冶屋村に起るなり、生き残りし人皆松前と天河とに住す、(「記録」上巻)

- ② 1457 (長祿元) 年 五月十四日、夷蜂起して志濃^{えぞ}利^{しのり}の館主小林太郎左衛門良景・箱館之河野加賀守政通を攻め撃つ、其の後、中野三郎 (之館カ) 佐藤三郎左衛門季則・脇本の南條治部少 (輔脱) 季継・^{おんないぐん}穩内郡の館主^{こもつち}蔭土甲斐守季直・^{およべ}覃部の今泉形 (刑) 部少 (輔脱) 季友・松前の守護下国山城守定季・相原周防守政胤・^{ねぼた}称保田の近藤四郎左衛門季常・原口の岡辺六郎左衛門季澄・比石の畠山末孫厚谷右近将堅 (監) 重政、所々の重鎮を攻め落とす、
- ③ 1458 (長祿2) 年 去年反逆の夷^{えぞ}の長胡奢魔院父子二人其の外、^{ウタリあまた}侑多利数多を斬り殺す、之に依って凶賊悉く敗北す、(後略)

長祿元年五月十四日夷狄蜂起し来って、志濃里の館主小林太郎左衛門尉良景、箱館の河野加賀守政通を攻め撃つ、其後中野の佐藤三郎左衛門尉季則、脇本の南條治部少季継、^{こもつち}穩内郡の館主^{およべ}蔭土甲斐守季直、^{およべ}覃部の今泉刑部少季友、松前の守護下国山城守定季、相原周防守政胤、^{ねぼた}称保田の近藤四郎右衛門尉季常、原口の岡辺六郎左衛門尉季澄、比石の館主畠山の末孫厚谷右近将監重政所々の重鎮を攻め落す、然りと雖も下之国の守護茂別八郎式部太輔家政、上之国の花沢之館主蠣崎修理大夫季繁、堅固に城を守り居す、其時上之国の守護信広朝臣惣大将として、狄の酋長^{コシャマイン}胡奢魔父父子二人を射殺し、^{ウタリあまた}侑多利数多を斬殺す、之に依て凶賊悉く敗北す、其後式部太輔中野の路を経て山越に上之国に来り、若狭守修理大夫に会い、献酬の礼有り、式部太輔家政は刀〈一文字〉を信広に授け勇功を賞せらる、又修理大夫は^{たち}喬刀〈来国俊〉を信広に授く、此時信広朝臣は若州より差し来りし助包の大刀を式部太輔に進ずるなり、修理大夫継子無し、故に政季朝臣の息女を得て子と為し信広に嫁せしめ、川北天河の洲崎の館に居えて家督と仰ぐ、信広朝臣実は安東太政季朝臣の曾孫なり、(「記録」上巻)

- ④ 1471 (文明3) 年 夏秋、兵乱す、疾疫飢饉海辺風災、^{ひとえぞ}人夷多く死す、

(「記録」関連記事なし)

- ⑤ 1515 (永正12) 年 夷蜂起す、六月廿二日、光広夷^{えぞ}の大將^{ショヤコウジ}庶野^{シヨヤコウジ}旬^{シヨヤコウジ}時兄弟二人を切り殺し東谷に埋める、夷塚と号す、(後略)

同 (永正) 十二年、夷の賊徒蜂起す、六月廿二日、光広朝臣計略を以て居宅の客殿と台所の内戸数間^{はず}を外し、縄を以て索ぎ置き、夷賊の酋長^{シヨヤコウジ}庶野^{シヨヤコウジ}旬^{シヨヤコウジ}時兄弟并に^{うたり}侑多利を招き入れ、一日酒を行い、彼等をして酔興に入らしめ、宝物を出して之を見せ、宝物を弄ぶ隙を窺い、此間数多の女共^{きめた}をして碁を擣たしめ、其の音に紛れて物具を鎧いて後、家内の戸を索ぐ縄を切り^{おしたお}推僣し、数人俄に客殿に乱れ入る、光広朝臣太刀を取り、夷の酋長二人を斬殺す、此喬刀は修理大夫の 信広朝臣に授けし〈来国俊〉なり、是より相継いで家の重宝となる、^{しかのみならず}以 加 侑多利夷一人も漏さず悉く討殺し、塚を小館の下に築き、夷共の死骸を埋む、之を夷塚と号す、季広朝臣の代迄夷狄をして敵対し発向せしめんと欲すれば、先ず此塚より^{ほのか}関の声風に

聞ゆると為すなり、(「記録」上巻)

⑥ 1525 (大永5) 年 春、東西両道の夷蜂起す、

之に依て夷狄悉く蜂起して、康正二年夏より大永五年春に遡るまで、東西数十日程の中に住する所の村々里々を破り、者某を殺す事、元は志濃里の鍛冶屋村に起るなり、活き残りし人皆松前と天河とに集住す、(「記録」上巻)

⑦ 1528 (享禄元) 年 夏、夷蜂起す、良広之を討つ、

享禄元年五月二十三日の夜、風雨荒れ、用心のため手鑓を提げて郭内を廻る、案の如く狄忍び来り、郭内を劫かさんとす、西の柵を上り越えんと欲するを見、鑓を式いて片手にて之を突く、狄則ち柵の外に転ぶ、故に同志の狄引き退き、郭内恙無し、早朝之を見るに突殺す処の狄の骸堀底に有り、鎧の胸板を後に突徹すに依て其より此鑓を家の重宝と為すなり、(「記録」上巻)

⑧ 1529 (享禄2) 年 春、多那嶮瀬多内へ出張る、工藤九郎左衛門尉祐兼をして之を討たしむ、祐兼の軍破れ打(討)ち死す、終に神ノ国を攻む、此の時祐兼弟祐致知略を以ゆ、

⑨ 1530 (享禄3) 年 大将多那嶮城下へ来たらしむ、良広弓を以て之を亡ぼし、残党敗比(北)す、論(偏)に祐攻(致)の功也、是れ祐長四代の孫光祐が子なり、

同(享禄)二年三月二十六日、狄発向して上之国和喜の館を攻めんと欲す、折節良廣朝臣館籠り、隠謀を將い和睦して数多の償を引き昇う、酋長多那嶮と云う狄、館之坂中平地の所にて償の物を請取り、乞と館の方を向き上げ悍愾ぶ処を矢倉より射る、此間百余間有り、其矢狄の胸板に中る、酋長の射殺されしを見て数百の侑多利遽騒ぎ逃げ散る、之を見て館内より打出でて、太刀刀を抜き連ねて追い行く、其比漸く谷々の雪消え、洪水漲るに依て、狄皆天河を渡り越えん欲して了簡無く河上指して逃げ行くを菱池に追込み、悉く討殺すなり、(「記録」上巻)

⑩ 1531 (享禄4) 年 五月廿五日夜雨、夷大館を侵さんと欲す、良広其の聲を聞き之を射殺す、

同(享禄)四年五月廿五日の夜、雨零る、狄忍び来り、良広朝臣の松前の大館を侵さんと欲し、密かに西沢の小橋を渡り上る、良広朝臣其聲を聞き、其所を覗い、小館の北門の外にて之を射る、狄敢て来らず、明朝狄の骸を見れば、矢賊に中り右肩より左脇に徹り、猶其矢先岸に入り羽を飲す、是良広朝臣の膂力人に勝り、壮年より常に三人張の弓を控きし故なり、闇夜に物を射中つる事は家に伝わる弓の秘術なり、(「記録」上巻)

⑪ 1536 (天文5) 年 六月廿三日、西夷の誼の大将多離困那夫婦を討つ、是れ多那嶮の聲なり、是より東西平均なり、

同（天文）五年六月廿三日、多離困那^{タリコナ}と云う狄と和睦し得意と成り、一日酒を行い、〈来国俊〉の喬刀を以て渠夫婦を一太刀宛に討つ、多離困那は左肩より右腰迄打落し、妻奴^{メノコシ}は一の胴を切放つ、此喬刀は細身にて長からずと雖も無比の大物切の故なり、彼の狄は多那嶮^{タナサカシ}の聳たれば、度々妻奴に勧められ、数年計略を廻らし、動もすれば舅の敵良広朝臣を殺さんと欲するの条、渠夫婦を討って以後国内東西安全なり、「記録」上巻）

では、個別にアイヌ蜂起関連の事例をみていきたい。

「年代記」① 1456 年条、② 1457 年条では、ほぼ「記録」と同内容である。③ 1458（長禄 2）年条は、重要な記事なので、当該年条の写真および翻刻文を掲げる。

去年反逆夷長胡奢魔院父子二人其外斬殺侏多利数多依之凶賊悉敗北

ここでは、反逆した夷^{えぞ}の長^{おさ}コシャマイン父子二人とその外の者が、侏多利^{ウタリ}（アイヌ語で「仲間」）多数を殺害したことによって凶賊は悉く敗北したとする。

中世最大のアイヌ蜂起とされるコシャマインの戦いは主謀者コシャマインが殺害されることで収束したのではなく、コシャマインらが同胞のアイヌたちを殺害したことで蜂起が終わったという記事は一概に信じがたく、「年代記」の誤記とも考えたくなる。しかし、訓点どおりに読み下すと先のような理解にならざるを得ない。なお、当該年条の記事および訓点は、北海道大学附属図書館北方資料室所蔵写本「夷之国松前年代記」（請求記号：旧記 819。1851 年に松前家旧蔵本より書写したとされるもの）でもまったく同じである。

次に、④ 1471 年条は戦乱（人災）だけでなく自然災害（天災）によって和人もアイヌも多数死亡したとする。これらが発生した具体的な地域や災害の詳細な描写はないものの、過酷な一年であっただろうことは想像に難くない。これに関して「記録」は黙して語らず、である。

⑤ 1515 年条は、蠣崎光広が蜂起したアイヌの大將ショヤコウジ兄弟二人を殺害して松前の東谷に埋めたとする。「記録」ではショヤコウジ兄弟二人の謀殺を詳細に描写したうえで、ショヤコウジに同伴したウタリ（仲間）を一人残らず殺害したとし、多数のアイヌが犠牲になったように記す。「年代記」よりも「記録」のほうが規模の大きな事件だったと読み取れる。

十年後の⑥ 1525 年条は、規模などの詳細を記さないものの、東西両道にわたる大規模なアイヌ蜂起があったとする。しかし、次の⑦のように、和人・蠣崎氏が何かしら関わったかどうかについての言及はない。「記録」は東西数十日程の間の和人集落がアイヌに攻撃された下限として大永五年を掲げるが、その後も⑪ 1536（天文 5）年までアイヌとの戦いが継続するため、大永は天文を誤解したものとも考えられる。いずれにしても「記録」は 90 ～ 100 年の長きにわたってアイヌと戦ったことを強調したいとみられる。

さらに数年後の⑦ 1528 年条では、夏にアイヌが蜂起したため、蠣崎良広がこれらを討ったと記すのみで、蜂起の具体像についてはほとんど言及がない。しかしながら、「記録」では蜂起の日時や天候まで記され、勝山館を襲ったアイヌを良広が撃退した様を詳しく描いている。

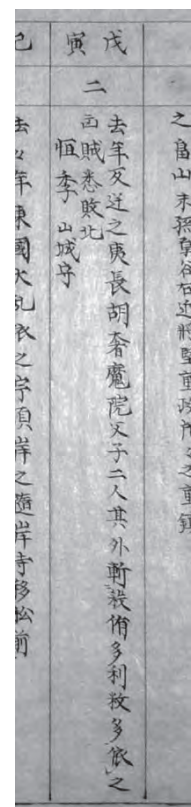


写真 1：「松前年代記」1458（長禄 2）年条。北海道立文書館所蔵写本

1529 年からの三年間は抗争が連続する。⑧ 1529 年条では、タナサカシが瀬多内^{せ とな い}へ出兵したことを受けて、蠣崎良広は工藤祐兼を派遣して追討しようとしたものの、タナサカシに攻撃されて、工藤祐兼が討ち死にする事態となる。タナサカシはついに神ノ国に攻め込むが、工藤祐致が知略を働かせたことで難をのがれたとしている。翌年⑨ 1530 年条では、アイヌの大將タナサカシが城下、おそらく松前大館へやってきた際、蠣崎良広は弓でタナサカシを射殺し、アイヌの残党は敗北したとする。⑧ における蠣崎氏の軍勢派遣が、和人の保護だったのか、アイヌの秩序維持だったのかは未詳だが、蠣崎氏が瀬田内まで関与した、関与せざるを得なかったことは、戦国時代の夷島の和人支配を考えるうえで重要になってくるだろう。「記録」はこれら⑧⑨の出来事を 1529 年 3 月 26 日一日のこととして記述し、上ノ国和喜之館（勝山館）内にアイヌの大將タナサカシを和睦と称して引き入れて弓で射殺し、これに慌てて逃げ出した同道のアイヌ数百人も悉く射殺したとし、大規模な戦いだったように描いている。

さらに翌年の⑩ 1531 年 5 月 25 日夜には、大將は未詳ながらアイヌが松前大館を襲撃しようとした際、蠣崎良広はアイヌの足音を聞いて、雨夜にも関わらず彼らを射殺したとする。「記録」は大館を襲撃しようと西沢の橋を渡ってきたアイヌの足音を聞いて矢を放ったところ、アイヌはそれ以上攻め上がってこなかった。翌朝、射殺されたアイヌの遺体をみると良広の矢は体を貫通しており、こうした弓の妙技は蠣崎家家伝の秘術だと強調する。

アイヌ蜂起の最後の記事となる⑪ 1536 年条では、6 月 23 日に、西夷^{にしえぞ}の^{はかりごと}大將が六年前⑨に殺害されたタナサカシの娘とその聲のタリコナ夫婦を討ち取ったことで、東西は平均となり平和となったとする。「記録」ではタナサカシと同様にタリコナ夫婦を和睦と称して館内に誘い込み、今回は名刀でもって謀殺したとのみ記す。ここには和人の関与が記されない。人名未詳の西夷の大將によって東西平均となったとするので、タリコナ夫婦およびタナサカシは東夷に比定でき、⑨で瀬田内へ攻め込んだことから推測すると、タナサカシらは内浦湾岸西部に拠点を置き、山を越えた日本海側の瀬田内と何かしらの敵対関係にあったのだろう。これから類推するに、蠣崎氏が瀬田内の和人ないしアイヌを攻撃してきた東夷のタナサカシを勢力から守るために派兵したにも関わらず敗北し、その挙句に拠点である神ノ国まで攻め込まれたことは、神ノ国最大の危機だっただろう。蠣崎氏が瀬田内の平和維持に陸路であれ海路であれ、派兵してまで関与している事態は他では知り得ない情報である。さらに興味深いのは、⑧に始まるアイヌ騒乱を収束させたのが、蠣崎氏による武力鎮圧ではなく、アイヌの謀略だったとみられることである。西夷の大將が敢えて「^{はかりごと}大將」と表現されるところに、彼が独自に動いたのではなく、蠣崎氏との何かしらの共謀があったことを暗示しているのだろう。ここには和人対アイヌという単純な二項対立の図式ではとらえきれない、複雑な人間関係が推測されよう。

ところで、時代は百数十年下るが、近世最大のアイヌ反乱とされるシャクシャインの戦い（寛文蝦夷蜂起ともいう・1669 年）は、そもそもはアイヌ集団間の利害対立に端を発し、その対立を松前藩が仲裁すべく平和的に介入したものの、事態は沈静化しては再び対立するなど一向に収束せず、最終的には和人とアイヌの大規模な武力衝突に発展してしまった。シャクシャインの戦いの経過のなかでは、和人と対立するアイヌだけでなく、アイヌ集団間の利害によって和人に協力するアイヌもみられるなど、アイヌが決して一枚岩で和人に対峙していたわけではなかったことが明らかにされている（榎森 2007・市毛 2008）。

シャクシャインの戦いを参考にすれば、「年代記」⑧～⑩の出来事も理解しやすくなるのではないだろうか。つまり、戦国時代からすでにアイヌ集団間で利害対立による武力衝突が発生し、そこに仲

裁役として和人も関与していた。仲裁が不調に終われば、かえって和人がアイヌに攻撃される事態も招来された。最終的に、和人に敵対するアイヌを、彼らと対立するアイヌに働きかけて攻撃させることで、和人の犠牲を増やさずに地域の秩序を回復していたのではなかったか。逆説的だが、シャクシャインの戦いに至る和人とアイヌの関係はすでに戦国時代に見られるものであり、シャクシャインの戦いは中世（戦国時代）的な和人对アイヌの関係に終止符を打つ出来事だったともいえるのではないだろうか。

以上、概観してきた「年代記」のアイヌ蜂起関連記事は、和人の蝦夷島支配が簡単な道程ではなく、和人とアイヌとが利害によって対立し共謀しながら、徐々に和人が勢力を拡大していったことを教えてくれるのではないだろうか。それは、「記録」に依拠した和人による一方的なアイヌ支配、蝦夷島支配というこれまでの歴史認識が絶対的なものではないことも教えてくれるだろう。情報量の少ない「年代記」だが、その持つ影響は決して小さくないのである。

むすびにかえて ―中世北海道の和人とアイヌの歴史を再考するために―

「松前年代記」と「新羅之記録」を対比して、上ノ国町に関わる地理認識と歴史認識を概観してきたが、現在主流となっている「新羅之記録」のみに依拠した地理認識・歴史認識の危うさが明らかになったかと思う。

「松前年代記」はようやく目の目をみた資料であり、今後文献史学的分析が一層求められるものではあるが、利用価値の高いものであることは疑いない。

歴史的事実の考察には多くの資料、多くの視点が不可欠である。歴史に光と影があることは紛れもない事実であり、時代状況によって歴史の評価が変化することもまた事実である。「松前年代記」によって、北海道中世史が少なからず修正される可能性も否定できない。現在は、さらなる資料の再検討などにより、21世紀の新たな北海道中世史像を描く時期なのかもしれない。

④ 近世・近代

信広から5代目の慶広は、豊臣秀吉より朱印状を賜って安藤氏から独立し、慶長4（1599）年姓を蠣崎から「松前」に改めている。さらに、慶長9（1604）年には徳川家康から黒印状を頂戴し、北海道で独占して交易をする権利を得ている。

そして、松前藩が成立し、新しい政治・経済のシステムが構築され、交易の中心も松前に移ることで勝山館の役割も終えたという。

勝山館廃絶後、16世紀末頃から本州諸国で城下町建設に伴う建築用材の需要が高まり、松前藩は檜山、山師、交易業務など取り締まるため、慶長元（1596）年に檜山番所を上ノ国に置き、檜材（ヒノキアスナロ）の伐採事業を展開した。

元和4（1618）年、イエズス会宣教師アンジェリスは、嵐に遭って松前湊よりも「奥の湊」に上陸、そこから困難な山越えの道を通り、数日後に目的地の松前城下に入っている。彼が3年後作製した地図に「奥の湊」をツガ（Tçuga）とし、これを天の川とする説がある（図1）。

上ノ国は、天文20（1551）年、「夷狄之商舶往還之法度」により天の川が日本海側におけるアイヌ地と和人地との境界となり、和人地に属している。

しかしながら、旧笹浪家住宅横（宮ノ沢右岸地点）の発掘調査では、慶長年間（1596～1615）の包含層からアイヌが儀式で使用するイクパスイが出土している（写真1）。

さらに、下の表1は『津軽一統志』に記される寛文9（1669）年の日本海側の家数を示したもの



図1 元和7（1621）年作製 アンジェリスのエゾ地図（北海道大学北方資料室所蔵）

で、上ノ国～江差までを抜粋したものである（北海道1969）。



写真1 宮ノ沢右岸から出土した17世紀初め頃のイクパスイ

江指	もしり	ごがて	上の國	原田	とりう泊	しねこ	きのこ	扇子石	塩ふき	はねさし	石崎	松前城下	地区
から家あり	から家あり	家十軒	家百四、五十軒	家四十軒	家十五軒	家四軒	家二〇軒	家七軒	家十五軒	家三軒	家二十三軒	家六、七百軒	家数
			有										アイヌ民族

表1 「津軽一統志」『新北海道史第七巻史料一』より抜粋して加筆

表1からは、17c中頃の日本海側において、上ノ国が最も家数が多く栄えていたことがわかる。また、イクパスイの発見と表1の記述によれば、上ノ国は和人地でありながらも実際に和人とともにアイヌも居住していたことがわかる。

上ノ国が北海道内において中心的な役割を担っていたのは、信広が勝山館を築城してから檜山番所が江差へ移るまでの約200年間のことであった。

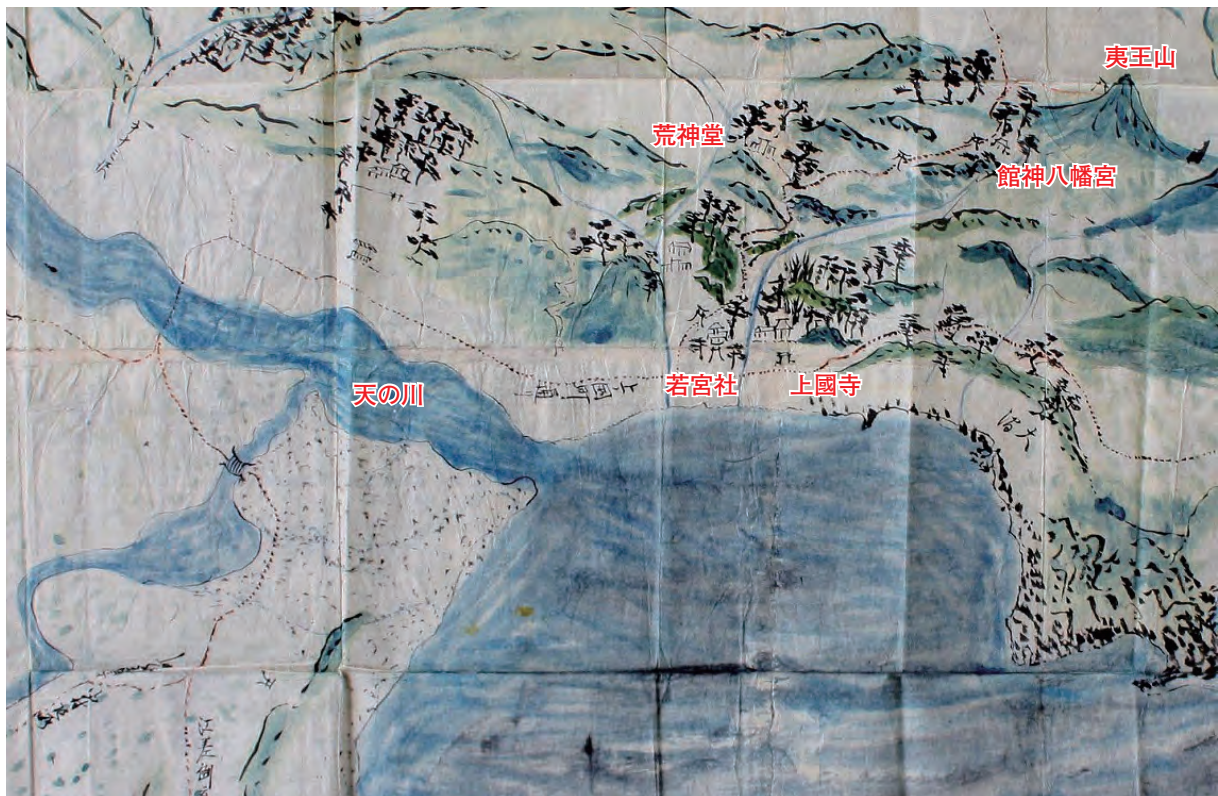


図2 慶応2（1866）年頃『上ノ国絵図』（北海道大学北方資料室所蔵）に加筆

明治2（1869）年6月館藩に所属し、同年8月に国郡画定により渡島国檜山郡に属している（下中2003）。明治6（1873）年には上ノ国村・大留村・北村・木ノ子村・塩吹村・石崎村・小砂子村の7村があったが、同35年7村が合併し、上ノ国町の前身2級町村上ノ国村となる。

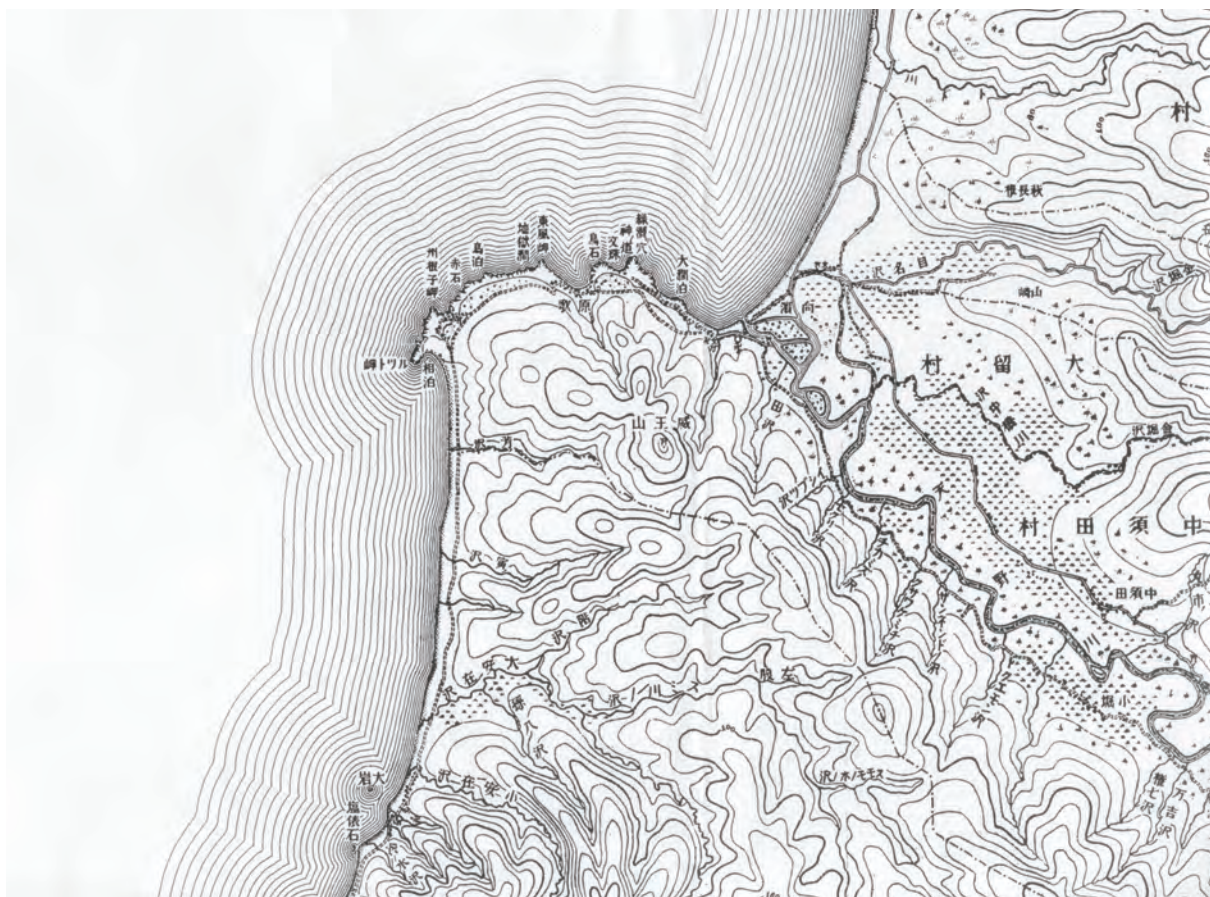


図3 明治 29 (1896) 年 上ノ国測量図 (7村合併前)



図4 大正 6 (1917) 年 上ノ国測量図 (2級町村上ノ国村)

(3) 上ノ国町の年表

ねん 年 上ノ国町の移り変わり ぴょう 表

時代	和 暦	西 暦	お も な で き ご と
氷 河		50万年前	夜明けの塔付近の平坦面(海成段丘)が形成される
		40万年前	勝山館跡の平坦面(海成段丘)が形成される。
		12万年前	道の駅もんじゅ付近の平坦面(海成段丘)が形成される。
旧石器		2万年前	石器を使う人が住んでいた。(旧石器時代)
		9千年前	道の駅もんじゅ付近に土器を使う人たちが暮らしはじめる。(縄文時代早期)
		6千年前	気候が温暖化して、海水面が現在より50～100cm上昇した(縄文海進)。勝山館で縄文時代の人たちが暮らしていた。(縄文時代前期)
縄 文		4千5百年前	勝山館やお浪沢B遺跡などで縄文時代の人たちが暮らしていた。(縄文時代中期)
		3千5百年前	大岱遺跡や上ノ国市街地遺跡などで縄文時代の人たちが暮らしていた。(縄文時代後期)
		2千5百年前	上ノ国市街地遺跡などで縄文時代の人たちが暮らしていた。(縄文時代晩期)
続縄文		2千年前	上ノ国市街地遺跡などで続縄文時代の人たちが暮らしていた。(続縄文時代)
擦文		千年前	擦文土器や五所川原で焼かれた須恵器を使う人たちが暮らしていた。
鎌倉	文治5	1189	源頼朝が奥州の藤原泰衡を追討し、糠部・津軽の人々が多数夷島に逃げ渡り居住する。
室 町	永享4	1432	蝦夷管領下国安藤盛季、南部氏との戦いで敗れ、十三湊の居館を失い、夷島(北海道)へ渡海する。
	嘉吉2	1442	安藤氏が再び南部氏との戦いに敗れ、翌年に夷島(北海道)へ渡海する。
	寛徳3	1451	8月28日武田信広と佐々木繁綱・工藤祐長が田名部から松前へ渡る。この時安藤政季・相原政胤・河野政通らも夷島へ渡る。(註:『新羅之記録』では、信広・政季の渡海について享徳3年(1454)としている。)
	享徳元	1452	武田信広が天の川(上ノ国)に住む。
	康正2	1456	アイヌ民族が蜂起し、余市からむかわに住む和人が多く殺される。下国安藤政季、秋田の小鹿島(男鹿半島)に進出し、のちに秋田の桧山(能代市)に移る。
	長禄元	1457	5月、東部のアイヌ民族の酋長コシャマインが大挙して攻め、諸館陥落し、(石崎の比石館も陥落)上ノ国花沢館、下ノ国茂別館だけが残る。6月コシャマインの戦いが終結。
			8月信広が蠣崎家を継ぎ、天の川の北に新居の洲崎館を築き移り住む。
	寛正3	1462	信広が洲崎館の北に昆沙門天王社を建立する。(今の砂館神社)
	文明5	1473	信広が勝山館に八幡宮を建立する。(館神八幡宮と称し、今の上ノ国八幡宮)
	明応3	1494	信広が勝山館で没し(64歳)、夷王山に葬られる。
	永正11	1514	3月2世光広が180隻の兵船を率い、上ノ国から松前の大館に移る。同年秋泊の館

室町	永正11	1514	主高広(光広の次子)を勝山館の守護とする。
	大永5	1525	アイヌ民族が蜂起し、和人は上ノ国と徳山(松前)に避難する。
	享禄5	1529	西部の酋長タナケシが瀬田内の館を陥れ、上ノ国に進攻して3世義広に勝山館で射殺される。
	天文5	1536	西部の酋長タリコナが兵を挙げたので、夫妻を勝山館に誘殺する。
	天文17	1548	上ノ国の守護 蠣崎基広が謀叛を企て、4世季広に討たれる。
安土桃山	天文19	1550	松山城主下国安東舜季、夷島を視察する(東公の嶋渡)。季広は蝦夷と講和し、せたなの酋長ハシタインを上ノ国に置いて西夷の長として、俸米を給し、夷島交易とアイヌの統括に当たらせる。
	天文23	1554	上ノ国守護南条広継の妻の陰謀が顕れ、夫妻自殺する。
	永禄5	1562	季広が医王山薬師堂(今の夷王山神社)を建立して信広を祀る。
	天正6	1578	正広(季広四男)が安土において織田信長に謁見する。
	天正13	1585	松山安東愛季、湊安東氏の家督を譲られ、両安東家を統一する。
	天正18	1590	慶広が豊臣秀吉に会い、夷島主として待遇される。
	天正19	1591	愛季の子実季、安倍安東姓を秋田城介姓に改める。
	慶長元	1596	松山番所が上ノ国に置かれる。
	慶長3	1598	上ノ国に若宮社創立。大蔵鯉伝説おこる。
	慶長4	1599	慶広が大坂で徳川家康に会い、姓を松前と改める。
江戸	慶長9	1604	慶広、家康より黒印状を賜る。松前藩成立。
	慶長15	1610	花山院少将忠長が夷島流罪となり、上ノ国に来る。
	元和4	1618	イタリア人宣教師ジェロニモ・デ・アンジェリス、松前に渡る途中、難航して上ノ国大河に上陸する。
	寛永16	1639	焼失した福山城の修復に上ノ国目名の松材を用いる。 松前における切支丹門徒106人が斬首される。 (内6人は上ノ国石崎で処刑される。)
	寛永17	1640	駒ヶ岳が噴火して、火山灰(Ko-d)が上ノ国で確認される。
	正保2	1645	実季の子俊季陸奥国、三春(福島県三春町)に移封される。
	寛文6	1666	円空が松前からせたなへ行く途中、石崎・木ノ子・上ノ国・北村に自作の仏像を残す。
	寛文9	1669	シャクシャインの戦い。
	元禄8	1695	江差の松山から出火した山火事が上ノ国目名、檜川、厚沢部に及ぶ。
	享禄4	1719	幕命により松前藩から上ノ国八幡牧野産馬二頭が献上される。
戸	享保9	1724	奥尻島神威山噴火し、降灰数里に及ぶ。
	寛保元	1741	大島噴火。大津波により死者約2,000人。
	明和3	1766	上ノ国に専念寺(いまの清浄寺)が建てられる。
	安永7	1778	北村の毘沙門天王社が焼失、名主は責を恐れ自殺。

江え	天明4	1784	奥羽大凶作(天明の大飢饉)。津軽の人多く渡海す。
	寛政元	1789	菅江真澄来遊。「蝦夷喧辞弁」を著し、この地方の民情・風俗等を克明に記す。
	寛政2	1790	石崎から熊石までの漁民、一揆をおこす。(江差漁民騒動)
	享和元	1801	14代藩主章広が上ノ国三社に参詣。
	文化4	1807	松前及び蝦夷地、幕府直轄地となり、14代藩主章広、奥州梁川に移封される。
戸ど	文政5	1822	章広が復封され、夷王山神社を再建させ、5月帰国秋参詣。
	安政3	1856	17代藩主崇広が上ノ国三社に参詣。
	安政5	1858	北村(炭焼沢)に拓いた新村久兵衛の水田が大いに稔り、藩主に献上。
	明治元	1868	幕府の脱走軍来襲して大滝で戦闘があり、つづいて江差、厚沢部でも戦闘が行われ、館城が陥ち、藩主徳広は熊石から小舟で青森に逃れる。
	11	1878	勝山小学校開校。
明めい	12	1879	上ノ国村内に三戸長役場が置かれる。
	13	1880	上ノ国郵便局が創始される。
	15	1882	砂館・早川・汐吹・安在各小学校開校。
	17	1884	小砂子小学校開校。
	20	1887	警察署分署が置かれ、警部補ほか2名が配置される。
	27	1894	松前修広子爵来村。武田信広の400年祭を執行。
	28	1895	上ノ国消防組が設置される。
	33	1900	勝山小学校湯ノ岱分校が置かれる。
	35	1902	上ノ国外六ヶ村を合わせて上ノ国村とし、二級町村制施行。
	37	1904	洲根子岬に監視哨設置(少尉以下17人)。
治じ	41	1908	川崎船始めて原歌に入り、上野銀蔵はいか釣に随い大漁となる。
	大正元	1912	石崎森林事務所を上ノ国に移し、上ノ国森林事務所とした。
	9	1920	悪性流行感冒が猛威を振り、死者116名に達する。
	10	1921	木古内山道開通。
	11	1922	上ノ国・石崎間道路(準地方費道)竣工。
大たい	12	1923	扇石の木村隆吉が発動機船(25馬力)を導入して、助宗漁をはじめる。
	昭和2	1927	上ノ国森林事務所が松前に移る。役場庁舎新築。
	3	1928	八幡野共同牧場が村有になる。
	6	1931	上ノ国産業組合(上ノ国町農協)設立。
	9	1934	石崎船入瀬が竣工する。
	10	1935	国鉄江差線が湯ノ岱まで開通する。
	11	1936	国鉄江差線全線開通。
	14	1939	今井石崎鉱山、八田鉱山(中外鉱山)がマンガン鉱開発に着手。
	21	1946	江差信用組合(信用金庫)上ノ国支所ができる。

昭和 和	昭和24	1949	早川道路(石崎～中外)が開通。
	27	1952	藤信鉱業桂岡鉱山が鉄鉱の採掘をはじめる。 明治大学が夷王山墳墓群の発掘調査を行う。
	31	1956	松崎岩穂著上ノ国村史が発刊される。
	32	1957	上國寺本堂が道有形文化財に指定される。汐吹漁港竣工。
	33	1958	天の川永久橋竣工。
	34	1959	勝山館跡、道史跡に指定される。
	35	1960	花沢館跡、道史跡に指定される。夷王山地域、桧山道立自然公園に指定される。
	37	1962	松崎岩穂著続上ノ国村史が刊行。
	39	1964	夷王山墳墓群発掘調査される。
	41	1966	夷王山墳墓群が道史跡に指定される。
	42	1967	町制施行なる。
	44	1969	肉牛生産振興地域として道の指定を受ける。
	45	1970	上ノ国歯科診療所開設。上ノ国町郷土館完成。 上ノ国町民のうたが制定される。
	46	1971	夷王山地区自然研究路ができる。
	47	1972	町民憲章制定される。北村目名川にサケ・マスふ化場完成。
	48	1973	町民体育館完成。常設上ノ国保育所完成。広域水道事業完成する。
	50	1975	国民温泉保養センター完成。大留鹿子舞、町文化財に指定。
	51	1976	町民プール、にじます加工場、林業センター、町立湯ノ岱保育所、種豚育成センターが完成。
	52	1977	全町電話ダイヤル化となる。
	53	1978	勝山、花沢館跡国の史跡に指定。神明小中学校閉校となる。 町立石崎保育所、木ノ子・扇石・汐吹地区に簡易水道、山菜加工場(湯ノ岱)に完成。 あわびの中間育成施設が大崎地先に建設される。 100年記念「上ノ国音頭」ができる。10月25日100年記念式典が行われる。
	54	1979	国指定史跡勝山館跡の発掘調査始まる。国道228号小砂子トンネル工事着工。
	55	1980	町立石崎診療所新築なる。 役場庁舎、上ノ国町ほか三町組合立上ノ国高等学校の新築工事が着工。 国道228号石崎～小砂子間の12橋完成。
	56	1981	役場新庁舎完成。町制施行15年と合わせて落成式を挙行。道道石崎松前線開通。 上ノ国町ほか三町組合立上ノ国高等学校校舎完成。
	57	1982	上ノ国町ほか三町組合立上ノ国高等学校開校、第1回入学式。

昭和	昭和57	1982	第1回産業まつり行われる。 社会福祉法人上ノ国福祉会特別養護老人ホームかみのくに荘が完成。
	58	1983	特別養護老人ホームかみのくに荘が開荘。
	59	1984	町立上ノ国診療所新築なる。
	60	1985	組合立上ノ国高等学校が道立移管となり、第1回卒業生を送る。 町立河北小、上ノ国小学校新築起工式を同日挙行。
	61	1986	上ノ国郵便局新局舎、大留に完成。 町立河北小学校新築なる。
	62	1987	中外鉦山上ノ国鉦業所操業44年間の歴史に幕を閉じる。 国道バイパス、汐吹・扇石間開通。小砂子トンネル開通。スポーツの町を宣言。
	63	1988	若葉小学校閉校。上ノ国小学校全面改築工事完成。
			滝沢常設保育所開設。
			上ノ国町農協、上ノ国中央農協合併契約調印、新生上ノ国町農協誕生。
			上ノ国800年祭各種イベント夷王山、天の川を中心に盛大に挙行。
平成	平成元	1989	中世以前からの交流の歴史が縁で、青森県市浦村と友好町村の協定を締結。 開基800年記念事業、北海道夜明けの展望塔建設される。
			漁協養殖部会養殖サクラマス半冷薫“チェリーサーモン”開発。
	2	1990	高齢者事業団結成される。 上ノ国特産キヌサヤエンドウ生産販売1億円を突破。
	3	1991	北海道最古の民家“世浪家住宅”町に寄贈される。 高生産性農業をめざして農業指導センター設置される。
	4	1992	一般国道228号扇石バイパス開通。 上ノ国町商工会館、観光案内所落成オープン。
	5	1993	旧笹浪家住宅が国の重要文化財に指定される。 日本海情報交流館“文珠”オープン。 木工芸センター“赤坂”が完成。
	6	1994	農業振興の中核施設「農業指導センター」が完成。
	7	1995	上ノ国寺本堂が国の重要文化財に指定される。 北海道南西沖地震発生。
	8	1996	戦後最悪の大冷害。 ふるさと通信システム「防災行政無線」開局。
			花沢温泉自噴。新天の川橋完成。桧山8町漁業協同組合が合併される。

平成 成	平成9	1997	はな ざわ おん せん かん い よくじょう じょせい かつ どう し えん 花沢温泉簡易浴場オープン。女性活動支援センター「ゆいっこハウス」が完成。 きやう ふく やま かい どう もん か ちやう れき し みち せん せん てい 旧福山街道文化庁の「歴史の道」100選に選定される。 ちやう せい し こう しやうねん き ねん しきてん おこな 町制施行30周年記念式典が行われる。 し が けん あ づちやう ゆう こう ちやう てい けつ ちやう いん 滋賀県安土町と友好町の締結調印。
	10	1998	あま がわ かん せい みや ごしやう がっ こう へい こう 天の川かささぎロード完成。宮越小学校閉校。 たき ざわしやう がっ こう ぜん めん かい ちく こう じ かん せい 滝沢小学校全面改築工事完成。
	11	1999	と きよきやう ぞだ きよきやう さい ばい きよきやう そう こう かん せい 獲る漁業から育てる漁業へ、栽培漁業総合センター完成。 ようしやく きよきやう せい さん き ち はらう た ち く かい よう ぼくしやうしやん こう 養殖漁業の生産基地、原歌地区海洋牧場竣工。 ゆ の たいしやう がっ こう ぜん めん かい ちく こう じ かん せい 湯ノ岱小学校全面改築工事完成。
	13	2001	はや かわ ちやう がっ こう へい こう に きやう ちやう ぜん せい し こう しやうねん き ねん じ きやう じつ し 早川中学校閉校。二級町村制施行100周年記念事業実施。 かみ の くに ちやう こう れい しや の うりやく かつ よう かつ やま こうりやう かん かん せい 上ノ国町高齢者能力活用センター「勝山交流館」完成。
	14	2002	かみ の くに かん せい こ めい こ めい めい 上ノ国ダム完成、湖名を「あすなる湖」に命名。 かみ の くに ちやう こう れい しや の うりやく かつ よう そう こう こうりやう はや かわ しやう がっ こう ぜん めん かい ちく こう じ 上ノ国町高齢者等健康づくり総合交流センター、早川小学校全面改築工事が かん せい 完成する。 きやう さき なみ け しやう たく しやう ふく こう じ かん りやう 旧笹浪家住宅修復工事完了。
	15	2003	いし ざき きやう こう くに し てい とう ろく ゆう けい ふん か ざい かつ やま だて あと し せつ かん せい 石崎漁港トンネル、国指定の登録有形文化財に。勝山館跡ガイダンス施設完成。
	17	2005	おお さきしやう がっ こう はい こう かつ やま だて あと し せつ いっ ばん こう かい かい し 大崎小学校廃校。勝山館跡ガイダンス施設一般公開開始。
	21	2009	に ほん かい しやう ほう こうりやう かん ない ふっ さん かい せつ 日本海情報交流館内に「物産センター」開設。 さい い か い りやう ひ じ こ ふ たん ふん む りやう 18歳以下の医療費自己負担分を無料にする。
	23	2011	ひかり きやう ち じやう ほう そう かい し フレッツ光供用、地上デジタル放送が開始する。
	25	2013	ちい さ こ しやう がっ こう きやう こう 小砂子小学校が休校。
	26	2014	ほ いく りやう しやう ちやう がっ こう きやう しやく ひ がく どう ほ いく はつ たつ し えん り よう りやう む りやう か 保育料、小中学校の給食費、学童保育、こども発達支援センター利用料を無料化 する。ＪＲ江差線が廃線。風力発電施設上ノ国ウィンドファームが運転を開始。 うん てん かい し 湯ノ岱・早川・小砂子小学校が廃校。滝沢保育所が閉所。
	27	2015	ゆ の たい はや かわ ちい さ こ しやう がっ こう はい こう たき ざわ ほ いく じょ へい しや 湯ノ岱・早川・小砂子小学校が廃校。滝沢保育所が閉所。
	28	2016	ほっ かい どう しん かん せん かい きやう がつ に ち しん よし ぼり かん せい 3月26日北海道新幹線が開業。11月30日新吉堀トンネル(1.5km)が完成。
	29	2017	ちやう せい し こう しやうねん むか はな ざわ おん せん かん い よくじやう た か 町制施行50周年を迎える。花沢温泉簡易浴場が建て替えとなる。